

〔東京桑野会〕

同時代を生きた

二人の博士

東京桑野会会長代行

浅川 章

(七十六期)

野口英世博士

一昨年秋、猪苗代湖畔に野口英世記念館を訪ねた。生家から磐梯山を望み、南に猪苗代湖が広がる。十九歳で医学の道を目指して上京する前日、清作少年は生家の床柱に「志を得ざれば再び此地を踏まず」と小刀で刻んだ。その刻んだ文字跡をじっと見つめると、百二十余年を経た床柱から何とも名状しがたいエネルギーが部屋全体に迸り充滿している。思わず少年清作の雄叫びを聞いたような気がして私は立ち竦んだ。保存されているこの床柱の文字を見るたび、彼のすさまじい意志力に驚嘆する。

明治中期の日本では、医学への道は極めて狭く、猪苗代高等小学校の優等生といっても貧しい農家の長男として生まれた清作にとつては経済的に至難のわざであった。しかし、学歴のない彼は猛勉強と負けじ魂とによって次々と難関

を突破、上京し、渡米し、ロックフェラー医学研究所を足場に梅毒スピロヘータの純粹培養の成功など幾多の輝かしい業績をあげていった。

野口の人生における強烈な克己心とあくなきチャレンジ精神源泉は那辺に由来するか。

野口が一歳半の時、母シカが目を離れた隙に囲炉裏に落ち左手に大火傷を負い、松ぼっくりのように固まってしまった。貧しい家計では手術もままならず、少年時代の彼は左手の不自由をからかわれ続けた。己が不注意で息子に痛手を与えてしまったシカは、清作が農家の後継ぎとなることを断念し、「学問の道に生きよ」と彼を叱咤激励し続けた。野口は人生を通じて母の思いを心に固く刻んだ。

米国を中心に世界を駆けめぐって活躍した野口は、大正四(1915)年ただ一度だけ帰国している。帰国は老境に入った母シカの手紙がきっかけだった。シカには息子に大火傷を負わせた自責の念がいつもあった。この目で出世した英世を見たい。その手紙が記念館に展示されている。人並みに字も学べず、囲炉裏の灰でいろはの文字を覚えたというシカがひらがなだけの金釘文字で書き綴った手紙で「はやくきてくれたされ はやくきてくれたされはやくきてくれたされ はやくきてくれたされ」と

四度も繰り返し息子の帰国を訴える痛切な文面に接するたびに、母シカの真情を思い思わず涙を禁じえなかった。

福島県出身で野口英世ほど世界に名を知られた日本人はいない。世界各地にある銅像、レリーフの数は130にもものぼっている。野口は決して神童ではなかった。行く手には幾多の困難が待ち受け、挫折の連続であった。それを乗り越える不屈の闘志と超人的な努力は他に類を見ない。

野口を発奮させ駆動させた原動力は何か。思うに大火傷を負った左手のコンプレックスと手の不自由な彼には「学問の道しかない」と言い聞かせた母シカに報いる思いが胸の奥底にあったこと、それと野口の才能を見抜き、終生精神的にも金銭的にも支え続けた猪苗



母シカ(左)と小林栄夫人(右)

代高等小学校の首席訓導だった恩師小林栄、野口の左手の手術を執刀し、その彼も医学の勉強に便宜を与え続けた会津若松在住の米国帰りのドクター渡部鼎など多くの支援者に恵まれた。また、高等小学校時代の級友達が左手の手術の代金の一助にとこぞってカンパに応じたと伝えられている。言わば、今日の社会では弱くなつたといわれる地縁、血縁、恩師、同級生などの人的ネットワークの強固さがもう一つの源泉ではなかったかと言えよう。野口にはこうした恩顧に学問研究の結果で難としても応えたいという固い決意があった。

朝河貫一博士

母校の正面にある安積歴史博物館に入る。朝河貫一顕彰展示室に入ると、室全体のピーンと張りつめた空気に全身が包み込まれて肅然とする。思わず背筋を正さざるをえない。そして、



博士の肖像に正対すると激動の二十世紀初頭に、安積野に学び、太平洋を渡った異国の地で国際的歴史学者として活躍し、政治の分野でも世界平和に貢献した博士の偉大な生涯に思いを馳せる。

明治六（1873）年、二本松に生まれた朝河貫一は二十一歳で渡米、英文の『大化改新』でエール大学博士号を得、東西の比較法制史の研究分野で金字塔といわれる『入来文書』を公開し欧米歴史学に衝撃を与えた。一方、『日露衝突』『日本の禍機』等の著書でもって日露戦争以後の日本外交への忠告と批判に全力を傾注し、ルーズベルト米国大統領に対する「天皇への親書運動」に奔走し、日米開戦の回避に尽力した。

朝河貫一は旧二本松藩士宗形治太夫の次男正澄の長男として生まれた。父正澄は『論語』の「吾ガ道、一ヲ以テ之ヲ貫ク」という言葉から貫一と命名した。

幼少の頃から学力に秀でて、小学校、高等小学校を最優秀で終え、福島県尋常中学校（後に安積中学校）の卒業式で首席卒業の彼は総代として答辞を英語で述べた。来賓の誰もがあっけにとられ、列席していた御雇い英国人教師ハリファックスは感じ入り、「やがて世界はこの人

を知るであろう」と語ったという。記録には、明治二十五年三月、第四回卒業生一覧表に「成績点九〇、席順一、伊達郡士族、朝河貫一」とある。

中学卒業後、朝河は同窓会にいくつかの通信を寄せた。その中から例示する。

―誰ぞある 我に“人”を教えよ、我に人の“義務”を与へよ、さらば我生さん。

―何はともあれ私は他人が百年の生涯中 嘗て経験し給はざりし大變動を生きる前より経来り、今も経つつあり将来も幾千倍することをなすべく、死して後も未来永劫劇変を続け申すべきことと覚悟致候。

―私は死する迄自分を知らず候、文を知らんとて、未来無窮に煩悶致申さんのみ。

これらの文から人生航路に幾千の艱難辛苦があるうとも立ち向かい、人としての義務を果たさぬという決意の一端がうかがえよう。

この頃から朝河は海外留学への強い意欲を抱き、その第一歩として明治二十五（1892）年に東京専門学校（後の早稲田大学）に進学した。文字通りの苦学生で翻訳の仕事や原稿料で学費を稼いだ。同校二年の時、米国ダートマス大学より「学費免除での留学」を許可されたが、渡航費の見通しが立たず金策に走った。力になつ

てくれたのは故郷福島の中学の旧友達であり、東京専門学校恩師の大西祝や学友に加え、大隈重信、坪内逍遙などの早稲田人脈、そして勝海舟、徳富蘇峰などの錚々たる顔ぶれであった。

野口英世にも共通するように、この時代の日本人の「人材を育てること」への滾るような情熱にはつくづく感嘆する。

朝河を語るとき、その人格形成に大きな影響を与えた父正澄の存在抜きには語れない。父正澄は青年期に戊辰戦争での二本松城炎上の悲劇を体験。明治維新によって士族としての糧道を断たれた。傘張りや手習師匠でその日の生計を支える貧窮の生活の中から、教育で身を立てることに活路を求めて教員資格の取得、伊達郡立子山の尋常高等小学校の校長にまで昇進した。

正澄は息子貫一にも学問によって身を立てさせんとの方針の下に五歳そこそこの貫一に日本外史、四書五経を教えるなど厳しく指導した。一家を背負い懸命に動いて家族を守ってきた父の後ろ姿を仰ぎ見てきた貫一は学問成就によって報いようと固く己に誓い、生涯を通して不転の覚悟で学問研究の道を邁進していく。

明治三十二（1899）年、ダートマス大学卒業間近の時、朝河は重大な転機に直面した。タッカー学長は朝河に重要な提案をした。「大

学拡張の一環として歴史科の中に東洋と西洋との関係を研究する分科を設け朝河にその教授をゆだねたい」というものであった。

渡米時の父との約束は在米五年ということだったが、息子の帰国を待ちわびる父へ「私は従来次第々々に広き世界に引きつけられ候、川俣より中学、中学より東京、東京より外国遊学、今度は日本より世界への相談に候。」と書き、自分がこうして世界のために学問に心ひかれていくのは、どうか「宿縁」とおぼしめし下され」と訴えた。

父正澄は「其許そのこゝろの天命に従い、天職を奉ずると思へば毫ちよも傷心致さず候間、必ず必ず心配なく御勤めなさるべく候。」と伝えてきた。正にこの親にしてこの子ありと感銘する。

二人の邂逅

大正十（1921）年六月二十二日、エール大学新総長就任式に野口英世も招かれ、エール大学は彼へ名誉理学博士の称号を授与した。ここに初めて二人の秀でた日本人学者が異国の地ニューヘーブンで対面した。朝河が生まれた二本松と野口が生まれた翁島とは安達太良山を挟んで指呼の間にすぎない。野口は朝河より三つ年下で、渡米は四年遅れていた。ともに貧しい

家庭に育ち、苦学に苦学を重ねながら、一人はエール大学への道を歩み、一人はロックフェラー医学研究所への道を歩んできた。

この日、野口はニューヨークからソプラノ歌手三浦環の夫三浦政太郎医師を伴っていた。就任式の後、朝河は二人と一緒に夕食を共にした後大学前の広い公園のベンチに座り、真夜中まで大いに歓談した。二人の博士は故国日本に思いを馳せて、磐梯山、猪苗代湖や安達太良山、安積野の四季を語り合ったに違いない。

参考文献

寺島実郎『二十世紀と格闘した先人たち』

新潮文庫 2015年

阿部善雄『最後の「日本人」朝河貫一の生涯』

岩波書店 1994年

付記

未曾有のコロナ禍の中で、2020年、2021年と東京桑野会総会は開催を見送った。この間、本年四月十五日、古川清会長（63期）が亡くなられた。氏は外交官として韓国公使、オマーン大使、アイルランド大使等を歴任された。また、皇太子殿下（現天皇陛下）に東宮大夫として奉職された。ここに謹んで哀悼の意を捧げます。

東京桑野会ホームページより

東京桑野会では、前古川清会長逝去に伴い臨時役員会にて浅川章氏（76期）が代表に選出されました。会則によれば「会長」は総会にて決定するため、次期総会まで「会長代行」として当会の代表を務めていただきます。さらに、浅川新会長代行体制のもとで幹事長が交代となります。前幹事長の上石利男氏（80期）から、新幹事長に石井俊一氏（82期）が後任として務めます。事務局も神田の「新神田法律事務所」から、銀座八丁目の「石井総合事務所」に引越しとなりました。

【令和3年6月15日 東京桑野会 会長代行就任のご挨拶】



会長代行
浅川 章

東京桑野会会長代行に推挙された浅川章（76期）です。未曾有のコロナ禍の中、昨年に引き続き東京桑野会総会は開催中止を余儀なくされました。この間古川清会長が2021年4月15日に逝去されました。大黒柱のような存在で、驚きと悲しみでいっぱいです。また、昨年5月20日に前会長代行の斉藤英彦さん、今年1月17日には副会長の高松豊さんが亡くなりました。お三方を失ったことは当会にとって大きな痛手で悲しい限りです。

古い会報によると当会は第2次大戦後間もないころ、在京の有力者が集まって再結成され、着実な発展をみて今日まで歩んできました。

東京桑野会三箇条が理念を示しています。

- ①桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること
- ②会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること
- ③何らかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること

たいまつは引き継がれました。そして、次代に託されなければなりません。会員一人一人が縦糸、横糸をしっかり紡ぎ、ネットワークを強固なものにしていきましょう。東京桑野会は、桑野の学び舎に青春を送った老年・中年・青年の皆さんの参加を心から歓迎します。

（東京桑野会会長代行 浅川 章）

【令和3年6月21日 東京桑野会 幹事長就任のご挨拶】



幹事長
石井 俊一

この1年ほどで古川会長をはじめ斉藤会長代行や高松副会長のご逝去、コロナ禍による総会の中止等々、いろいろなことが起きました。また、今年も総会が中止となり、幹事会も含め現状開催の見通しはたちません。会員の皆様には、いかがお暮らしでしょうか？

さて、出来事の追加でございますが、諸般の事情により、これまでの幹事長でおられた上石様から82期の私、石井俊一が暫時事務局をお預かりすることになりました。これまで幹事長として多大な貢献をされて来られました上石先輩に、厚く御礼と感謝を申し上げます。引き続き、東京桑野会にご協力を賜りたいと存じます。

とはいえ、お預かりはしたものの何分不慣れなわたくしのこと、当初は何かと皆様にご迷惑をおかけすることもあろうかと思ひます。その節は、どうぞ暖かいお叱りを賜りたいと存じます。簡単ではございますが、幹事長就任のご挨拶とさせていただきます。

（東京桑野会幹事長 石井 俊一）

編集部注） 新事務局は下記の通り、銀座八丁目の石井総合事務所内となります。